

グリーンと快樂主義の倫理学※

行 安 茂

序 論

本稿は私の学位論文の一部を少し修正し、加筆したものであるが、それが学位論文全体の中でいかなる位置をしめているかについて、少し述べておきたい。それに深入りする前に、内外においてグリーン
の倫理学がどのように研究されてきたかについて概観しておくのがよいであろう。グリーンを生んだ英国においては、かれの死後その影響を受けた学者や思想家はかなり多い。とくに、J・マッカーン、J・ミュアヘッド、R・L・ネットルシップ、W・D・レイモントが、グリーン研究者としてあげられるが、まだグリーンを本格的に研究しているとはいえない。ネットルシップは「トマス・ヒル・グリーンの回想録」(Memoir of Thomas Hill Green, 1906)において、グリーン
の伝記とその思想体系とを要領よくまとめており、グリーン研究の入門書としてはよいが、かれの思想を正面から研究的にとらえたものではない。レイモントは「グリーン
の道德哲学序説」(Introduction to Green's Moral Philosophy, 1934)において、グリーン
の「倫理学序説」(Prolegomena to Ethics)を平易に書き直し、かつ全体の配置を原書よりも少し変えており、付録には優れた研究論文がのせてあるが、グリーンを全体にわたって詳細に研究しているとはいえない。さらに、マッカーンは「六人の急進的思想家」(Six Radical Thinkers, 1910)の中で、グリーンを最後にとりあげ、主としてその政治思想を考察しているが、まだグリーン
の思想を本格的に研究しているとはいえない面がある。

このように、イギリスにおいてはグリーン
の思想をあらゆる角度から、全面的に研究した人は現在までのところ殆どいない状況である。これは一体何に原因があるのであろうか。グリーン
の理想主義は現在においては一考に値しないが故に、このような現状が起っているのではあろうか。最近の研究状況から

みると、グリーン
の思想は政治哲学の方面において注目されつつある。例えば、H・A・プリチャードは「道德的義務」(Moral Obligation, 1949)において、「グリーン
の政治義務の原理」という一節を設け、長いページにわたって論究している。周知のように、グリーンは「政治義務の原理についての講義」(Lectures on the Principles of Political Obligation)をしており、政治義務の原理を倫理学に求めた。この講義は倫理学の根本原理を、政治哲学の諸問題に適用しようと試みたものであるといえよう。この点は現在においても次第に注目されてきているようである。レイン・W・ランキャスターは「政治思想の諸大家」(Masters of Political Thought, 1959)の第三巻において、グリーン
の「政治義務の原理についての講義」をとりあげ、この中で最もグリーン
の思想をよく表現していると考えられる部分を引用し、これを解説し、批判している。これはある意味ではグリーン
の思想の現代的意義を見出だそうとする試みであるともいえよう。しかし、この試みもグリーン
についての本格的な研究とはいえない。最近になつて、ミルンが「英国理想主義の社会哲学」(The Social Philosophy of English Idealism, 1962)において、ブラッドリー、グリーン、ボーズンキット、ロイスの思想をとりあげ、グリーン
についてはその道德論と政治哲学とを重点的に考察している。こうした試みは、今日ややもすれば忘脚された観がないでもない、イギリスの理想主義哲学に対して注意を喚起せしめた点では意義があり、それを再評価しようとする傾向は無視できない。しかし、グリーン
の思想はまだ本格的に研究がなされていないのが現在の状況である。

以上を考察すれば、英国においてはグリーン
研究は本格的になされていないこと、第二に、研究が真正面からなされているようにみえても、それは紹介、解説の段階であるか、一部分の研究にすぎないこと、第三に、最近の研究状況はグリーン
の政治哲

※本稿は広島大学に提出された学位論文の一部である。

学の方面にあるが、政治哲学の基礎が倫理学にある以上、グリーン倫理学が根本的に理解されなければ、政治哲学も十分に把握されないであろう。この点に着目すれば、政治哲学のみを研究しても、それは砂上樓閣の危険がないとはいえない。してみれば、グリーン倫理学を根本的にかつ全面的に研究することは現在の要請でもあろう。

ひるがえって、日本におけるグリーン研究の状況はどうであろうか。明治初年においては、まず中島力造によつてグリーン倫理学が紹介された。明治35年に、西晋一郎はグリーン倫理学の「*Prolegomena to Ethics*」を「グリーン氏倫理学」として訳した。これはある意味では大きな研究業績であるといえよう。訳語について非常に苦心された跡が見うけられる。昭和7年、友枝高彦・近藤兵庫共訳による「グリーンとその倫理学」が出版された。この訳は西晋一郎の訳とは少し違ったところがある。西晋一郎の「グリーン氏倫理学」は実に丹念に逐語的に訳されているが、「グリーンとその倫理学」はグリーン倫理学の「*Prolegomena to Ethics*」の原文にそうではあるが、逐語的ではなく、自由に訳し、しかもグリーン倫理学の真意を失わぬように、適切にかつ平易に訳している。これは恐らくグリーン倫理学の「*Prolegomena to Ethics*」が難解であるためでもあろうが、この書物においては「稍反覆と冗長との弊」があったからである。「グリーンとその倫理学」には付録の形でグリーン倫理学の伝記がのせてあるが、これはネットルシップの「トマス・ヒル・グリーン倫理学の回想録」を訳したものと考えられる。

これより先、昭和5年に、河合栄治郎は「トマス・ヒル・グリーン倫理学の思想体系」なる著書を世に問うた。この著書はグリーン倫理学の思想を体系的に論究したものである。河合栄治郎はグリーン倫理学の思想を、認識論、欲望論、自由論、道徳哲学、宗教論、社会哲学、社会思想に分けて、体系的に考察した。グリーン倫理学の思想が構造的に示されている点では、この著書はグリーン倫理学研究史上劃期的労作といえよう。しかし、よく吟味してみると、河合栄治郎は第一にグリーン倫理学の思想体系を把握することに急であつたためか、その思想を深く吟味することに欠けているように見え、そのためか、考察が上すべりしている観がある。これは河合栄治郎が自己の思想体系を確立することに急であつたためかもしれない。第二に、かれはグリーン倫理学の思想体系を構造的に把握した点では優れているが、グリーン倫理学の思想についての歴史的背景の考察

が殆どなされていない。もとより、河合栄治郎もグリーン倫理学を、ギリシャ倫理、カント倫理、功利主義、キリスト教との関係において考察しているが、考察の視点がグリーン倫理学の文献の側からなされているにとどまり、関係ある諸思想家の文献の吟味からの考察がなされていないように見える。人はグリーン倫理学を、単にカントから影響を受けた思想家にすぎないといひ、またグリーン倫理学はヒュームを批判したことによって有名になったというが、では一体グリーン倫理学とカント、グリーン倫理学とヒュームとは思想的にはどのような関係にあるのだろうか。この点についての歴史的考察を試みた人はまだ見当らないようである。河合栄治郎もこの点について立ち入った研究をなしていない。グリーン倫理学は恩師ジョウエットを通してギリシャ倫理学の思想に眼を開かされ、プラトン・アリストテレスから影響を受けたといわれているが、ではグリーン倫理学はかれらからいかなる点において影響を受けたのか、またグリーン倫理学はギリシャ倫理学の思想に単に満足したにすぎなかったのだろうか。こうした点について詳細な論究はまだ試みられていない。いわんや、グリーン倫理学とキリスト教、グリーン倫理学と英国倫理学との関係についての本格的な研究はまだ未開拓であるといつてよい。グリーン倫理学を研究する以上、これらの点はまず第一に明らかにされなければならない重要な問題点である。

私は以上のごとき、グリーン倫理学の研究状況について以前から疑問を抱いてきた。そしてグリーン倫理学の思想を体系的観点と歴史的観点との、両観点から再吟味する必要があると考え、グリーン倫理学を進めてきたのである。私はまずグリーン倫理学を体系的観点から構造的に把握する必要があると考え、「倫理学序説」を丹念に分析した結果として、「グリーンにおける神聖的自我」(倫理学年報、第10集、日本倫理学会編)、「T・H・グリーンにおける自我と能力」(研究集録、第12号、岡山大学教育学部)、「グリーンにおける自我と目的」(哲学、第14輯、広島哲学学会編)、「グリーンにおける自我実現の社会的性格」(京都府私学研究論集、第2号、京都府)を発表した。これらの論文はいずれもグリーン倫理学における「自我」の構造を論究したものである。つぎに、歴史的観点からグリーン倫理学の思想的背景を明らかにするために、私は「T・H・グリーン倫理学の自我とアリストテレスの影響」(研究紀要、第6号、京都女子高等学校)、「T・H・グリーン倫理学とカント倫理」(研究紀要、第8号、京都女子高等学校)、「グリー

ンにおける自我の宗教的背景」(京都府私学研究論集, 第1号, 京都府)を公表した。同じく歴史的観点からグリーンと英国倫理学との関係を究明したものととして、「T・H・グリーンと功利主義」(倫理学年報, 第12集, 日本倫理学会編), 「道德教育の基礎研究」(研究紀要, 第7号, 京都女子高等学校), 「グリーンにおけるバトラー倫理の諸問題」(倫理学年報, 第14集, 日本倫理学会編)がすでに公にされた。これらの論文のうち、「道德教育の基礎研究」は実は全く学術的研究であって、グリーンとヒュームの関係、グリーンとロックとの関係を考察したものである。

以上がグリーン研究の骨子をなすのであるが、これを側面的に補う意味において、かれの生立ちを明らかにし、青年時代のかれの性格と自我との関係を理解する試みとして、私は「グリーンと青年時代と自我」(道德と教育, 昭和36年5月号, 日本道德教育学会編), 「T・H・グリーンの生涯と思想」(道德と教育, 昭和36年9月号, 日本道德教育学会編)を公表した。その他、グリーン研究の一環として「河合榮治郎の思想体系」(社会思想研究, 16巻, 40号, 社会思想研究会)があり、またグリーンと政治哲学の一面をとらえるため「グリーンにおける倫理と政治」(私学研修, 第27号, 私学研修福祉会)が発表された。

以上のごとき研究過程において、私が発見したことは、グリーンにおいては要するに「自我実現」(Self-Realisation)が根本問題になっていることであつた。グリーンはこの問題を中心にしながら、いろいろの角度から反覆しつつ、考察したわけである。そこで、私はグリーンと文献を中心にしながら、関係ある文献を分析し、整理しながら、グリーンと「自我実現」を組織的に研究し、かくしてまとめられたのが「グリーンにおける自我実現の研究」である。これが私の学位論文であつて、その構成はつぎのとおりである。

論文は三部から成立している。第一部は自我実現の基本構造を明らかにしたものであり、第二部は自我実現を英国倫理学との関係において吟味し、自我実現が主張されなければならなかつた歴史的背景を明らかにしようとしたものである。本稿のテーマ「グリーンと快樂主義の倫理学」はこの第二部にはいっており、グリーンとシジウィックとを比較することによって、自我実現と快樂主義との関係を考察したものである。第三部は自我実現を英国以外のヨ

ロッパの倫理学との関係において究明し、かくすることによって自我実現の理想主義的背景を明らかにしようとしたものである。

第一部においては自我とは何か、目的は自我とどのような関係にあるか、実現はどのように考えられているか、という問題がとりあげられた。グリーンにおいては自我は対象(または目的)と相関関係にある。自我を対象と密接に関連するところに、グリーンがカント倫理の抽象性を批判する理由があり、また快樂を欲求の対象とみる功利主義に対して批判する理由がある。グリーンがいう「対象」はもとより欲求の対象ではあるが、これは第一に快樂ではないのであり、第二にそれは人間完成に貢献する具体的対象(または目的)である。第三に、グリーンという自我は人間がもっている諸能力のことである。これらの能力は道徳的能力、神的能力、科学的能力、芸術的能力、社会的能力、に分けられる。かれのいう諸能力はまた理性、意志、徳、信仰、知性、権利および義務に相当する。

自我を実現することは以上のごとき意味における対象を実現することであり、以上のごとき意味における諸能力を実現することを意味する。さて、自我は自己に適したある対象を自己の最大善と同一視することによって、その対象を自己のものとして決定し、それを実現することによって自己の諸能力を發展させる。幸福はかかる実現の過程に存するのであつて、享樂感情に存するのではない。ところで、グリーンにおいては個人にとっての最大善としての対象は同時に共同善の対象であつた。すなわち、対象は私的対象として考えられているのではなくて、自己および他人にとって共通な目的として考えられているのである。自己意識はかかる意味の対象を含んでいる。

グリーンがこのように考えるに至つたのはかれが人間を社会の一員としてみることを重視したからである。社会の一員としての人間の資格は他人の自由な活動を認め、共同善の実現のためにはそれを妨げてはならない、という認識にある。社会の各成員がかかる認識をもつとき、かれは道徳的人格であるといえる。人格とは他人の権利を尊重し、その自由を認める主体である。権利は共同善を実現する力である。共同善はまた義務の遂行によつても実現される。義務は社会において置かれている各人の立場、地位、持場に与えられている。人間はこの通路を通して社会全体の利益および幸福の実現に貢献する。

これらの義務を遂行することによって、究極的には人類の完成が成就される。グリーンがこのように考えるに至ったのは従来の道徳的義務の観念があまりにも抽象的に考えられていたからであり、さらにかれの主張する神的自我実現の原理が抽象的にみられる懸念があったからである。神的自我実現の原理は各人の置かれている場を通して具体的に実現される。このような意味において、自我実現は考えられているのであって、その実現は連続的なものとして考えられており、この過程においては常に最善の自我が目的とされており、現実的自我はよりよき自我へ向って絶えず発展するものとみられているのである。

第二部において、私は英国倫理学に視点を置き、自我実現がなぜ主張されなければならなかったか、なぜ統一的自我が主張されなければならなかったかを吟味した。そのために、私はロック、バトラー、ヒューム、ベンサム、J・S・ミル、シジウィックをグリーンがどのように批判しているか、どの点から学びとるべきものを得たか、を考察した。グリーンはかれらの倫理学説を批判することによって、自我を主張しているからである。近世英国倫理学においてグリーンが終始問題にしたものは快楽である。この意味において本稿では「グリーンと快楽主義の倫理学」が考察されているのである。ここではシジウィックの快楽主義とグリーンの自我実現とが比較吟味された。英国における諸思想家において共通した問題は欲求の対象が快楽であるという点にあり、この観点から動機、幸福、責任といった諸問題がとりあげられている。グリーン疑問はこれらの問題が快楽の観点からすべて解決されるであろうか、という点にあった。グリーンによれば、道徳的行為を合理的に説明しようとする限り、それは快楽を中心原理とすることによって説明されない、とされた。快楽は実際においては行為への動機となっていないからである。グリーンはまた快楽が量的に増加されるであろうという仮定に対しても疑問をもった。かれがこのような疑問を提出するのは快楽が一時的な、はかないものとしてみられているからである。功利主義が批判されたのもこのような理由によるのである。

グリーンが以上のごとき疑問と批判とを投げかけたのはかれの念頭に統一的自我が予想されていたからである。自我は一時的なものではなくして、固定した一焦点である。自我は自然主義的（あるいは快

楽主義的）見地からは説明できないのであって、哲学的思惟によってのみ説明される。グリーンがヒュームの印象の継起としての自我を批判するのはこのような統一主体としての自我が考えられていたからである。グリーンは主体的自我である。グリーンがヒュームの傍観者という公平な第三者を、行為への動機を与えることができないものとして批判するのはこうした主体的自我への要求があったからである。

さて、英国倫理学においても一つの問題点があった。それは自愛と仁愛との関係についてである。バトラーにおいても、シジウィックにおいても、これら二つの原理は対等関係にあり、均衡状態において考えられている。あるときは自愛が仁愛よりも優位に置かれているようであるが、逆に仁愛の方が優位に考えられている場合もある。かれらにおいては道徳的行為は両原理の均衡の下に考えられている。バトラーやシジウィックはこれらの原理を統一的に考える必要はなかったのであろうか。グリーンがこのような疑問をいだくようになったのは、さきにもいったように、統一的自我がかれの念頭にあったからである。グリーンは自我を一元的にかつ全体的に考えているので、自愛と仁愛とを一元的関係において考察する必要があったわけである。

第三部においては私はグリーンとアリストテレス、グリーンとカント、グリーンとキリスト教との関係を自我実現の観点から考察し、もってグリーンがかれらからどのように影響されているか、グリーンがかれらをどのように批判しているか、を考察した。グリーンはアリストテレスの「ニコマコス倫理学」にみられる知恵、勇気、節制、正義、の四主徳に注目し、これらを吟味した。また、かれはアリストテレスの「形而上学」にみられる「質料」と「形相」「デュナミス」と「エネルゲイア」の関係に注目し、自我実現の動的性格をかれの形而上学から学びとろうとしている。ところで、さきにあげた四主徳はその定義としては問題はないが、近代キリスト教の諸徳とそれらとを比較するとき、その（ギリシャにおける諸徳の）範囲は狭い、とされた。古代ギリシャの諸徳はポリスにおいて考えられたものであり、その行きわたる範囲は制限されている。これに対して近代キリスト教国における諸徳はギリシャの諸徳に比べてその及ぶ範囲が一層広い。ギリシャにおいて卑しい階級とみられていた人々は今日ではこれらの諸徳に関与することができる。グリーンはこのよう

に考察することによって、キリスト教的諸徳に優位を認め、この観点からかれの主張する「献身」を諸徳の中心とみるのである。われわれはここにグリーン倫理学においてキリスト教の影響力の大きなることを発見することができる。

グリーン「自我」はキリスト教の本質ともみられる「霊」と殆ど同一である。また、グリーンにおいては理想的自我とは神のことである。かれが人間完成というとき、完成されるべき目的は理想的自我としての神である。ところで、この「霊」は各人の内に宿っている。人間が神のように自己を理想的に完成するためには、かれは霊と交わらなければならない。ここに信仰が要求される理由がある。グリーンは神を内在的神としてとらえる。神は人間の外ではなくて、かれの内に見出される。グリーンにとつては信仰とは内在的神への信仰であり、現実的自我を一層高めようとする努力である。それは克己を伴う。神は神学的議論によっては証明されない。グリーンがこのように考えるに至ったのはパウロの信仰から大きな影響をうけたからである。それはグリーンが引用している聖書の文句によってうかがわれる。

グリーンはカント倫理から影響をうけているが、他面それに対して批判をも加えている。グリーンがカントから学んだものは定言的命法、道徳法則、善なる意志、である。定言的命法はベンサム功利主義に比べてよりよき方式として受けいれられており、善なる意志は人間完成への意志に通ずるものとして受けとられている。しかし、グリーンはカント倫理を全面的に認めているのではなくて、その抽象性を批判した。周知のごとく、カントは欲求と理性とを矛盾・対立において見ているが、グリーンは両者を融合し、調和するものと見ている。何となれば行為への動機は理性だけではないからである。行為を動かすものは欲求（または欲望）である。しかし、欲求のみによっては道徳的行為は成立しない。欲求は理性的に方位づけられなければならない。ここに欲求の合理化が問題となる。具体的対象が自我と相関関係において考察されたのもこのためであり、自我が欲求的自我とみられているのもこのためである。グリーンにおいては欲求は理性的に生かさせようとしている。それはすべて悪であるとはいえない。欲求をいかなる対象と直結するかによって、行為が悪くなったり、善くなったりするのである。自我実現は以上のごとき意味において考えられているのであ

る。

(1) グリーンとシジウィックとの人物的比較

本稿で考察される「快樂主義の倫理学」は実はH・シジウィックの倫理学をさす。グリーンは当時の学界の問題点であったところの快樂主義の倫理に対して批判的であった。当時、イギリスにおいて快樂主義の倫理学を体系づけた人はH・シジウィックであった。かれはミルの功利主義に影響されながらも、バトラーやカントの倫理学からも影響された。それ故、シジウィックの倫理学には快樂主義の倫理が、単に心理学的見地からのみでなく、理性的見地からも考えられている。グリーンが批判したのはシジウィックの「倫理学の諸方法」において展開される快樂主義である。シジウィックもグリーン「倫理学序説」を批判した。かれらは当時の学界を代表する二大巨頭であり、それぞれ互いに批判し合った。われわれはかれらがいかなる点を問題としたか、快樂主義の欠点は何であったか、理想主義の欠点は何であったかを考察し、グリーン主張点とシジウィックのそれとを公平に比較し、当時の倫理学の根本問題を歴史的に考察したい。

まず、グリーンとシジウィックとを序論的に比較し、その人物なり性格なりを比較しておきたい。というのはかれらの性格や特徴がそれぞれの学風と関係があるようにみえるからである。グリーンは1836年4月にヨークシャー州に生れた。シジウィックは1838年5月にヨークシャー州に生れた。生立をみると、二人とも片親によって育てられた。グリーンは1才のとき、母に死別された。シジウィックは3才のとき、父に死別された。かれらの父親はともに牧師であった。家の職業もかれらの思想に影響しているのではないだろうか。かれらは同じラグビー校に入り、ここで中等教育を受けた。当時、シジウィックの友人達のなかには、T・H・グリーン、チャールズ・パウエン、ディキンズがいたといわれているが¹⁾、これらの中でシジウィックはグリーンとは特別に親しかったようにはみえない、といわれている。しかし、学問の世界においては、両者は互いに批判しあっている。「グリーンとシジウィックとは哲学上の問題について目と目を向け合わせなかったことの方が、二人の間に長年の友情があったことよりも、一般によく知られている。」²⁾

では、グリーンはいかなる人物であろうか。この点についてはすでに考察したことがあるので³⁾、こ

ここではグリーンの人物については考察を省略し、シジウィックの人物について少し見ておきたい。

Sidgwick という言葉は第四世紀頃には、**Sedgwick** とよばれていたという。イギリスのウエストモアランド（ヨークシャーの北西に隣接する州）には、**Sedgwick** とよばれる村があるという。**Sedgwick** という語は **Siggiswick** という語から由来し、この語は「**Siggi** とよばれる北欧移住民の酪農」⁴⁾を意味するとされている。1745年、**Sedgwick** が **Sidgwick** に変わったといわれている。さて、**Henry Sidgwick** はいかなる人であったらうか。かれは、少年の頃、どもりであったという。そのためか、かれの文章は非常に退屈感を与える。かれは母の影響のためか⁵⁾、優れた分析力をもっていた。「シジウィックは深い道徳的真面目さを、完全な冷静さと道徳的熱狂の欠如とに結びつけた。かれは問題のすべての面をながめ、それらの相対的重要性を評価する点で無敵であった。かれは重要な問題について、その証拠が不十分なとき、あるいは矛盾するようなときに、急いで結論をきめようとする自然的欲求を許さなかった。」⁶⁾ シジウィックは公平にかつ冷静に問題を考察する人であった。この意味において、かれは合理的科学的精神をもった倫理学者であった。そのためか、現代のイギリスの哲学者（例えば、ムーア、ブロード、ラッセル）はシジウィックを高く評価している。シジウィックはこのように、合理的客観的であったためか、つぎのような短所が指摘されている。

「しかし、シジウィックは著述家として大きな欠点をもったために、かれの名声は確かに落されてきた。シジウィックの文体は重苦しく、かつ入り組んでいる。そして、かれはあのユーモアの強い感じ（これがシジウィックを愉快な話手にさせたといわれている）によって、著述がもつ単調な、面白くない威厳を殆ど救わなかった。シジウィックは絶えず洗練し、制限し、反対をあげ、それに答え、つぎにその答に対する反対をさらに見つける。これらの異論、反ばく、返答、第二訴答、の各々はそれ自体としては賞賛すべきであり、著者の鋭さと公平無私とに対し、無限の名誉となる。しかし、読者は我慢できなくなり、議論の糸を失い、かくして、机から立ち上り、自分は絶えず賞賛して読んだが、今は殆ど何も記憶していないことに気づく。」⁷⁾ 確かに、シジウィックの著書はここにいわれている通りである。「倫理学の諸方法」(**The Methods of Ethics**) を読ん

でみると、確かに分析力の鋭さと公平無私とが一貫されている。シジウィックはこの著書のなかで、グリーン倫理学を詳細に批判した。グリーンも「倫理学序説」(**Prolegomena to Ethics**) においてシジウィックの倫理学をかなり批判している。これらの論争点を見ると、われわれは第十九世紀のイギリス倫理学界において、何が問題となっていたかを知ることができる。上記二つの著書は確かに問題の書である。しかもそれらは現在においても高く評価されている。例えば「シジウィックの **The Methods of Ethics** は全体としてみれば、道徳論についての論文としては、今まで書かれたなかで最良のものであり、イギリス哲学上の古典の一つであるようにみえる。」⁸⁾ といわれ、グリーンについては「私は **The Prolegomena** が現在占めている地位を全く満たすような著書を知らない。歴史的観点からすれば、それはイギリスの理想主義学派が生み出した道徳哲学についての最大の論文である。」⁹⁾ とレイモントは評している。

われわれは両著書を比較することによつて、第一に、第十九世紀のイギリス倫理学界の論争点を理解することができ、第二に、グリーン倫理想主義的背景とシジウィックの快楽主義的背景とをよりよく知ることができる。当時、グリーンとシジウィックとはしばしば比較された。例えば、経済学者A・マーシャルはシジウィックの大学行政について手腕および見解を批判したとき、グリーンを引き合いに出した。シジウィックは自分がグリーンと比較されるのを好まなかったという。グリーンは哲学を市民のものにしようとしたが、シジウィックは少数の専門の学生に哲学を講義した。シジウィックは「私は哲学—私の哲学—を大衆的にすることができるとしても、希望しない。そして私がそれを希望するとしても、できないだろう。」¹⁰⁾ といっているが、これはグリーンと比較していわれたものと考えられる。現代においても、グリーンとシジウィックとは比較され、その長所・短所が指摘されている。ブロードは「T・H・グリーンのような第二流の思想家でさえも、倫理的『向上』という心地よい慰めの香りを広めることによって、シジウィックが大学生を哲学者にするであろう人数よりも多くの大学生を道徳家ぶる人にしてきたであろう。」¹¹⁾ といっているが、この点についてレイモントは「シジウィックの名高い過去および現在の多くの弟子のなかで、誰一人としてブロード博士のグリーンについての評価を是認す

る人はいないであろう、と私は確信する。」¹²⁾と反論している。以上のような意味においても、われわれはグリーンとシジウィックとを比較し、両者の論争点をあげ、何故かれらは快樂主義を中心にして論争しなければならなかったのか、その理由および歴史的事情を考察することは決して無意味ではないだろう。というのもイギリスの倫理思想史は快樂を中心に議論されてきた一断面をもっているからである。

(2) シジウィックにおける理性の問題

グリーンは「倫理学序説」の第四編、「道德哲学の、行為の指導への適用」において、シジウィックの「究竟善」(Ultimate good)を批判した。批判された点はシジウィックが理性をどのように見ているかに集中される。グリーンによれば、「『理性的存在者としてわれわれは明らかに善一般を目ざすべきであって、単にこの部分、あの部分を目ざすべきではない。』そして、最後の寄りどころとして、われわれは善に幸福以外の意味を与えることはできない。幸福＝望ましい意識＝快樂。それ故、理性はすべての感覺的存在者の善(または幸福)からなるところの最高善を目ざせよ、とわれわれに命ずる。即ち、それがあまり、あるいは確かに、知られも達せられもしない場合は別として、ある人の善を他の人の善と同じように目ざせよ、と命ずる。」¹³⁾ここにのべられている考えはシジウィックの「倫理学の諸方法」のなかにみられる見解である¹⁴⁾。シジウィックによれば、理性は究極目的、すなわち、理性の対象たる快樂に関係するのである。理性は、すべての人々の幸福を平等に考えるべし、とわれわれに命ずる。それは部分的幸福ではなくて、一般的幸福を目ざすべきものであった。かれが「普遍的快樂主義」を唱えるのもこうした見地からである。イギリスの倫理学、例えば、ロックやヒュームのそれにおいては、理性は手段を決定する能力であったが、シジウィックの倫理学においては、理性は目的を決定する能力であった。イギリス経験論においては、合理的とか非合理的とか、という言葉は目的への手段を選ぶ場合に用いられている。シジウィックは一方ではイギリスの経験論の影響をうけているが、他方では、理性を重視する点で、カントやバトラーの影響をうけているものと考えられる。

グリーンによれば、シジウィックのいう理性は快樂に関係している、とされた。シジウィックにおい

ては「望ましい意識」が究極目的であり、この点でそれは理性の対象であったが、それが直ちに快樂と同一視されているところに、シジウィックの倫理学が理性的面と心理学的面とを合わせもっていることがわかるのである。ところで、この望ましい意識は「すべての感覺的存在者に快樂を与える」という意味での「普遍的快樂」(Universal Pleasure)である。シジウィックがこの点を重視し、強調したのはつぎの理由によるのであった。第一に、快樂を人間の行為や欲求の目的とするとき、直ちに想起されるのは自己自身の快樂を追求すべしという点である。この利己主義的表現(シジウィックはこれを不合理と考える)をさけるために、「普遍的快樂」が問題になったわけである。シジウィックは利己主義と「最大多数の最大幸福」との関係に関心をもった。第二に、理性を強調するとき、それはややもすれば、理性の満足を求むべし、ということになりはしないか、かれの心中には、従来この傾向が見られたように見える、という暗黙の批判があったと考えられる。理性が理性の満足を求むべし、という表現は、グリーンによれば同語反復であり、内容のない、抽象的表現であったが、シジウィックもこのように考えていたに違いない。シジウィックは、理性に内容を与えようとする見地から、快樂を依然として強調したものと考えられる。以上の理由から、シジウィックは普遍的快樂主義を唱えるに至ったが、かれにおいては果して理性は矛盾なくその体系を貫いているであろうか、これがグリーンの問題であった。

グリーンはシジウィックの倫理学体系において the desired と the desirable との関係が矛盾なく説明されていない点を指摘した。前者は欲求された快樂に当るが、これは実は各人の自己自身の快樂である、とされている。これに対して、後者は「合理的に望ましいもの」(the rationally desirable)であつて、これは「普遍的快樂」を意味するとされた。これら二つの間に一貫した論理的関係がシジウィックの倫理学体系において、果して見られるか、どうかグリーンは疑問であった。このような疑問からグリーンはつぎのように批判している。「理性が、望ましいところの、あるいは、欲求されるべきところの、意識を求めているという事実は、実は誰もが自然に欲求するが、その理由から誰もそれを欲求されるべきものとは考えていないようなものに満足することができないことを示している。ある

対象を欲求されるべきものとして提示することは、その対象がそのように提示される人には快楽として欲求されないことを意味する。」¹⁵⁾ シジウィックの思想には自然と理性、現実に欲求されているものと望ましいもの、この二つが同時に混合されている、とグリーンは見る。自然と理性とが区別されなければならないとかれはいう。なぜかといえば、自然に欲求しているものは欲求されるべきものと一致しているとは限らないからである。シジウィックにおいては欲求されるべきものは快楽であるとされた。しかし、快楽は自然的傾向の向う対象であるから、それは必ずしも望まれるべき対象であるとは限らない。人間が自然に欲求しているものは必ずしも理性的に欲求される対象と一致しないからである。

グリーンは自然と理性とを対立的に考えているが、シジウィックは両者を一致するものと見ている。つぎに、第二の問題点として、普遍的快楽と本人との関係が注目された。シジウィックによれば、普遍的快楽は本人との関係を表現しているのではなくて、本人以外の人との関係を表現しているとされる。グリーンはこの点について「ある快楽の望ましきはその快楽の享受を欲求する人以外のある人との関係を常に表現しなければならない。かくして、ある意識が同一の人によつて快楽として欲求され、同時に望ましいものとして考えられると想定することは矛盾である。」¹⁶⁾ という。いいかえれば、人間は快楽の望ましきを経験することはできないのであろう。何となればシジウィックにおいては望ましいものは他人に与えられるべき快楽であるからである。人間は望ましいものとは区別された、快楽を欲求することができるにすぎない、というのであろう。こうした矛盾が起るのは、一つには、シジウィックが *the desired* と *the desirable* とを峻別したことにもよるであろうが、二つには理性をどのように見るかについて、シジウィックとグリーンとはそれぞれ見解を異にすることにもよるであろう。シジウィックにおいては、理性は自己自身に向う快楽と他人に向う快楽とを比較する能力ともみられているようであるが、グリーンにおいては、理性は自己自身の状態を考える能力と考えられている。この状態は、もとより、よりよき自己の状態のことである。グリーンは、そうだからといって、他人を無視しているのでは決してない。

では、グリーンにおいては理性と快楽、理性と望ましいもの、この両者の関係はどのようになっている

るのであろうか。かれによれば、快楽と望ましいものとは理性が自己の存在状態として求めるところの、理想的状態であって、これらはすべて自己に関係しているとされた。しかるに、シジウィックにおいては快楽は自己の快楽であり、望ましいものは他人の快楽である。あたかも自己の快楽は望ましくないかのようであり、他人の快楽のみが望ましいかのようである。しかし、「倫理学の諸方法」、第二編「利己主義的快楽主義」において、自己自身の快楽が重要視されている。かれはその論拠をベンサムとバトラーとに求めた。この点を考えると、グリーンは批判する点が妥当であるかどうかについて疑問をもつけれども、グリーンの見地からすれば、快楽と理性との直接関係は対立的関係としてみられており、両者が合目的に調和するものとはみられていない。このようにしてシジウィック批判が出ているのである。

(3) 快楽のはかなさの問題

以上は主として「倫理学序説」を手がかりにしなから考察したのであるが、本節では「倫理学の諸方法」を中心にして、快楽主義の問題を考察してみることとする。シジウィックによれば、グリーンが快楽主義を批判する大きな理由は「快楽のはかなさ」にあるとされている。事実、グリーンは「倫理学序説」において「永久的」という語を多く用いているが、これは「快楽のはかなさ」に対する批判の結果、生れたものであろう。グリーンは *transiency of Pleasure* をつぎのような理由から問題にしている、とみられている。「快楽のはかなさの意識がそのとき快楽をあまり快的にせず、その後には苦痛を惹起すると主張され、快楽を思慮深く、組織的に追求することはこの意識を強める傾向になると主張され、しかも、この命題が経験によつて支持されるならば、それは確かに利己主義的快楽主義の方法に対する適切な反対論となるだろう。そして、この見解は上に引用された著者（グリーン）の心のなかにあるようである。（もつともそれはどこにもはつきりと述べられてはいないが）何となればグリーンはつぎのように主張するからである。『自我の満足は快楽のどんな継起においても見出されない。』自我の満足は『留りかつ自己自身を留るものとして沈思する自我の満足』であるから、少なくとも相対的に永久的でなければならない。」¹⁷⁾ グリーンが快楽を批判するのはこれが継起現象としてかれに映

じたからである。この現象は瞬間の殺那現象にも通ずるであろう。そこで、これに対してグリーンは「留る」(abiding)という言葉をもち出すのである。これは「永久的」とも訳されるように、快樂の繼起的性格に対して考えられているのである。グリーンの問題意識はいかにすれば自我が満足されるか、という一点にあった。かれの倫理学はこの点を出発点としながら、体系化されているともみられるのである。その満足が果して快樂の繼起現象のなかに求められるであろうか、これがグリーンの問題であった。人間は一面において酒色の徒であるが、これにとどまる限り、真の満足を得ることはできないはずである。とすれば、それは単に快樂を享受するという経験以外のところに、求められなければならないことになるだろう。では、これはどこに求められているのであろうか。グリーンはそれをいろいろな角度から体系的に考察しているが、ここではそれに深入りすることを省略する。

要するに、グリーンにおいては快樂は過ぎ去りやすいものと考えられ、一時的なものとして考えられているのである。これに対してグリーンは自我を永久的(永続的)と考えているのである。この観点からシジウィックの快樂主義を見るとき、快樂の組織的 pursuit は自己敗北の危険性を含んでいるとみられるのであるが、かれは「組織的 pursuit」ということによって、これを単なる快樂の pursuit から区別しようとしている。「私はこのことから快樂の pursuit が必然的に自己敗北的であり、効果のないものであると推論するのではなくて、ただつぎのように推論するだろう。利己主義的快樂主義の原理は、人間性の法則についての正当なる知識によって応用されるならば、実際には自己限定的であること、すなわち、それが目ざす目的を達成しようとする合理的方法はわれわれがその目的をある程度無視し、それを直接目ざさないように要求する。私は以前この結論を『利己主義的快樂主義の根本的逆説』とよんだことがある。しかし、それが逆説として現われるけれども、含まれている危険が一度はっきりと見えるならば、それを実際実現するときには、何の困難もないようにみえる。何となれば人々がどんな pursuit に従事しようとも、かれらは自分の努力の最初の対象および目的を度外視し、この目的への手段を目的それ自身とみなすことは人々の間ではあまりにも普通の経験であるからである。」¹⁸⁾ シジウィックにおいては the systematic Pursuit of Pleasure は敗北に終らないもの

とみられているのである。快樂は追求の直接的目的とされていないからである。なるほど、究極的目的は快樂であろうが、シジウィックはこれを得るためにはその手段を直接的目的とし、これを実現するところに、快樂があるとされているのである。

「多くの中年の英国人は仕事は娛樂よりも一層楽しいものであるという見解を主張するであろう。しかし、かれらは付随する快樂を絶えず意識して目ざしながら、仕事を扱うならば、殆ど仕事が楽しいことに気づかないであろう。」¹⁹⁾ シジウィックは中年の英国人の常識に立ってものを考えているのである。かれは Common sense を重要視した。かれは絶えずこの線でものを考え、思索を進めている。事実、「倫理学の諸方法」においては「常識」がかなり重視され、この観点から功利主義と利己主義との関係も検討された。ところで、快樂への手段が目的それ自身とされていることは以上のとおりであるが、この目的を実現するに際して、快樂は実現の過程において得られるのか、それとも実現の結果において得られるのか、という問題が起るであろう。シジウィックもこの点に注目していたようである。なぜかといえば、かれは「追求の快樂」(the Pleasure of Pursuit) と「達成の快樂」(the Pleasure of Attainment) とを区別しているからである。²⁰⁾ 前者は追求それ自体(活動それ自体)に快樂を見出す考え方である。後者は目的が達成されてしまった、という完了の意味に考えられている。「利己主義的快樂主義の根本的逆説」は前者に当るものと考えられる。

以上のごとく考察すれば、グリーンが指摘する「快樂のはかなさ」の意識はシジウィックの倫理学体系からは出てこないように見える。シジウィックの逆説を考慮に入れるならば、グリーンはあえて快樂を一時的な、はかない現象としてのみ見る必要はなかったであろう。しかし、グリーンは快樂をはかない感情として見る。そればかりではない。グリーンによれば、快樂の pursuit は悪徳の pursuit を導くものとされている。かれは快樂の pursuit を酒色の徒と関係があるようにさえ考えているようである。かれがこのような見方をしていたとすれば、その由ってきたところは何であろうか。かれは「家族の幸福」をししばし問題にした。快樂のはかなさの問題は「家族の幸福」を重視するかれの立場から吟味されているのである。「人が……それを想像することによって、かれの諸欲求が時々刺戟されるところの快樂の

はかなさを反省し、それらの欲求を貫いてとどまり、かつこれらの欲求よりも長生きするところの、自我を満足させてくれるものは何であるかを尋ねるならば、家族の幸福を考えることが心をとらえる。

(かれはこれと自分自身とを同一にし、その連続はかれ自身のものである。) …… 家族の幸福を考えることは、これと矛盾するとみられてきた快樂の追求を妨げるほど強くはないにしても、少なくともその追求において自責の念、すなわち、この追求はあべきではないという意識を目ざます。」²¹⁾

(4) 快樂の総計の問題

シジウィックが主張する快樂主義は快樂が量的に合計されうるものであるという仮定に立っている。かれは、この点で、ベンサム功利主義を受けついでいるが、シジウィックはベンサムよりも哲学的に快樂を考究した。しかし、シジウィックが試みた快樂についての量的計算はグリーンにとっては疑問であった。なぜかといえば「究極的目的が快樂の最大可能の総計であるということは、厳密に言えば、それは永久に後退する目的であるというのと同じである。それは達しえられないのみならず、事態の本性からみて、一層近く接近できるものではない。そして、かかる目的は、人々をそれに近づける行為を、そうでない行為から区別せしめることによって、標準の目的に役立てることは明らかにできない。」²²⁾ からである。快樂は絶えず後退するから、決して合計されえない。快樂は変化し、流動的であるから、その合計が困難であるのだらう。グリーンが以上のような批判をするのは快樂が快的感情としてみられているからである。ある快的感情を初めて経験したときとこれを何百回か経験したときとを比較してみても、回数が多くなるにしたがって、快的感情が初めの快的感情よりも大きくなるであろうか。「かれはある快的感情の何百万回目かのくり返しを、その快樂が感じられた初めの時よりも一層自己満足に自分が近づきものと見なすことは実際できない。」²³⁾

すなわち、最初に経験した快的感情も百万回目に経験した快的感情も、満足の度合においては同一である、とされる。いかに快的感情がくり返されても、その度数が増すことによって快樂が増すことはありえないというのである。グリーンは「各々の快樂は享受において滅びる。」²⁴⁾ といっている。快樂はこれを享受することによって快的に感じられるのであるが、快樂が一たび享受されると、その快樂は

滅びる。したがって、快樂はその享受のたびごとに消滅することになる。しかし、このゆえに、快樂がしだいに減少していくとも考えられないであろう。他方、さきにもいったように、快樂が増大するとも考えられない。なるほど、快樂はその享受において一時的には高まるが、それはやがて消えるであろう。このように考えてくると、「快樂の最大可能の総計」が果して成立するものであるかどうかは疑問である、とグリーンはいいたいのである。確かに、人間の行為を動機づけるものはわれわれの内において生起するところのある観念であり、その主要なものが快樂の観念であることも事実の一端を示しているが、快樂の観念が「快樂の総計」の観念に直通するものであるかどうかは疑問であろう。快樂が量としてとらえられるかどうか。快樂が連続的に増大するものとして考えられるかどうか。これがグリーン疑問であった。「快的感情の状態の源がいかにか多かるうとも、快的感情は一つであり、他の快的感情が享受される以前に、すでに終わっている。」²⁵⁾ これからわかるように、グリーンにおいては、快的感情(グリーンはこれを快樂と見る)は一つ一つ経験され、そのたびごとに完了しているのであるから、快的感情は決して連続しないものとみられているのである。このような背景から、「快樂の総計の観念」(the idea of the sum of Pleasure)を主張するシジウィックの快樂主義に問題があったわけである。

では、シジウィック自身はこの点についてどのように考えているのであろうか。かれは自分の用いた「快樂の最大可能の総計」が無意味である、というグリーン批判に注目した。グリーンは「快的感情は加えられるような量ではない」「何となれば各々の快樂感情は他の快的感情が始まる前に、すでに終わっているからである。」といっているとされているが²⁶⁾、グリーンのこうした言葉はシジウィックの快樂主義に対する批判として受けとってよい。これらの言葉は、第一に快樂が感情としてとらえられていること、第二に、快的感情は合計されないこと、の二点を示している。これらの理由から、グリーンは「快樂の最大可能の総計」が不可能であることを主張するのであるが、シジウィックにとってはこのような批判はいかに受け入れられたであろうか。シジウィックによれば、「私は、すべての、あるいは、大ていの人々にとって幸福の重要な要素が快樂の『相対的に永久的』源——外的には富、社会的地位、

家族、友人、内的には知識、教養、公平に繁榮している人または制度の福祉に対する強くて生々とした関心——をもっているという意識から由来することを疑わない。」²⁷⁾とされている。これによってシジウィックは幸福の源あるいは幸福を構成する要素を指摘しているのだが、これが快樂の量的増大を可能とする根拠であるとはいえないであろう。なるほど、上記の源は快樂を生ぜしめるであろうが、それを所有することによって、快樂が最大限にまで合計されるかどうかは問題であろう。富や社会的地位を得れば、それがなくなるときは快的感情が経験されるが、これらの要素を所有するたびに、快的感情が増大するとはいえないように見えるが、シジウィックはこの点をどのように考えているのであろうか。このような疑問が生ずるのも実は快樂がコンスタントとして考えられるように見えるからである。すなわち、快樂は量的に増大しているとも、低下しているとも考えられず、むしろ均衡状態にあるとみるのが適当ではないであろうか。もしそうでないとしたら、快樂はあるときは非常に高まり、あるときは非常に低くなる、というように、快樂の経験に波が生ずることになる。この場合、快樂は増大しているときと低下しているときとが考えられるから、快樂が最大の快樂にまで合計されることは困難であろう。グリーンがシジウィックに対して批判するのも以上のような理由によるところがあるようである。

(5) シジウィックの見たグリーン倫理学

以上は主としてグリーンがシジウィックの倫理学をいかに見ているかを中心としながら、その問題をさぐってみたのであるが、つぎに、逆にシジウィックがグリーン倫理学をどのように見ているかを考察し、その問題点をさぐってみることにしたい。シジウィックは「グリーン、スペンサー、マルチノーの倫理学」(The Ethics of T. H. Green, H. Spencer, and J. Martineau, 1902)において、第十九世紀における三人の思想家を批判した。その批判は鋭くかつ分析的の方法によってなされている。シジウィックはグリーン「倫理学序説」を最初から各編、各章別に順次詳細に分析し、批判していった。批判された大きな論点の一つは、グリーンにおいて強調された「能力の実現」(realisation of capabilities)である。グリーン倫理学を貫いて

いるものは「能力の実現」が善であるという考えである。これが「自我実現」の別名ともみられるのだが、シジウィックはこの点について多くの疑問を投げかけた。

いったい「能力」は誰のそれをさしているのか、という疑問からシジウィックは批判する。なぜこのような疑問が生ずるかといえば、能力は聖人の能力として考えられるだけでなく、罪人の能力とも考えられるからである。「酒色にふける人の能力」もありうるからである。かれらはみな力(能力)を実現しているはずである。シジウィックによれば「罪人は……この広い意味において、聖人と同じ程度に諸能力を実現している。」²⁸⁾とされた。では、グリーンは「能力」をこのような広い意味に考えていたのであろうか。かれは聖人のみの能力を考えていたのであろうか。もしそうだとすれば、グリーン「諸能力の実現」は狭い範囲で考えられていることになる。しかし、もし能力の実現が罪人や酒色にふける人の能力をも含んでいるとすれば、これらいろいろ能力を区別する必要があったであろう。これがシジウィックのいいたい点である。

第二に、能力の実現と自我の満足とは、グリーンにおいては、どのような関係にあるのかという点があげられた。グリーンにおいては諸能力が実現されるならば、自我が満足される、と考えられている。この満足は一時的なものではなくて、永久的満足とされている。グリーンは自我を永久的とみており、快樂に対立する概念として重要視した。ところが、シジウィックはこの満足を問題にした。「われわれは『能力の実現』を、より広い、もっと普通の意味に考えるならば、それはどのようにして測定されるべきか、その諸要素はいかにして比較されるのか。ある能力—満足する能力—は酒色にふける人を実現されている。事実、人間生活においては、われわれは常にある程度、あらゆる行為、感覚、情緒、思考において能力を実現している。そして『能力を実現すること』において、われわれは『安楽』または『永続的な満足』を見出すようにはみえない。…」²⁹⁾この文からうかがうと、シジウィックは「能力の実現」について客観的尺度を要求していることがわかる。恐らく、シジウィックにとっては、どの程度能力が実現されるならば、それが善とよばれるのか、どの程度能力が実現されるならば、自我が満足されるのかを決定する尺度が必要である、とされたのであろう。シジウィックはグリーンという

「完成」についても尺度を要求している。「完成はいかにして定義され、いかにして測定されるのか」という点は同様にあいまいのままである。私が指摘しようとするのは目的としての完成（または諸能力の完全な実現）に対してつぎのような根本的反対論があるという点である。すなわち、それ（完成）はこの世俗的範囲においては明らかに達成されない目的であると。……道徳的進歩の道は、たとえ徳を除いたすべての人間的善に対する最もストア的軽蔑をもって追求されるとしても、道徳的行為者の努力が少なくとも地上生活の範囲内で『安楽』を見出すものであるように思われぬ。³⁰⁾

確かに、グリーンは「地上生活」と超世俗的生活とを対立せしめている。この対立から現実的自我と理想的自我との対立も生じてくる。そして、グリーンは前者から後者への発展を「道徳的進歩の道」と見る。しかし、シジウィックにいわせると、このような進歩は「世俗的範囲」において達成されるであろうかが疑問であった。グリーンは世俗に対立する超世俗的世界を宗教と見、道徳と宗教とを結合しようとしたが、シジウィックによれば、宗教の世界を倫理学にもち込むことはできないとされた。倫理学の問題はあくまでも世俗の中にありつつ、科学的に考究されなければならなかったわけである。そうである限り、グリーンという「安楽」は見出されぬはずであった。「安楽」を見出すために、超世俗的世界を問題にすることは倫理学の範囲を越えているからである。シジウィックは倫理学を独立した学問と見た。かれは「倫理学の諸方法」³¹⁾の関係を考察するに当って、神と義務との関係を問題にしたが、そのとき、かれは「われわれが倫理学を単に可能な独立した科学として考えるならば、今われわれがその妥当性を考えている根本的前提を有神論的形式に投げられる必要はない。」³²⁾といい、「私はすべての私の諸義務を、それらがあたかも神の命令であるかのようにみなす道徳的必然性の下で、私自身を考える気にはなれない。」³³⁾ともいっている。こうした言葉からうかがわれるように、シジウィックは倫理学と神学との間に一線を引くのである。かれは倫理学をあくまで科学的に扱う。このような観点から、シジウィックはグリーンを批判したのである。

「ある意味においては、われわれが見てきたように、これまでのすべての人間生活は諸能力の実現であった。そのすべての部分は同様に善と関係しているだろうか。そうでないならば、標準は何か。」³⁴⁾

シジウィックのこの疑問から推察すれば、諸能力の実現は悪であったことも考えられるかもしれない。とすれば何が善と悪とを区別する標準であるのか。善を能力の実現とみることが不適当な結論を引き出す恐れはないのか。これがシジウィックの疑問であった。この点を吟味する前に、グリーン「人間性の理想への献身」に注目しておいた方がよいであろう。グリーンはこの「献身」を善とみているのである。すなわち、人間性(人類愛)への献身的意志が善であると考えられているのである。諸能力はすべてこれを目的として実現されるべきものであった。この点に注目すれば、諸能力の実現は善の諸相としてみられるであろうが、シジウィックはこのようには解釈しない。「答として、私はつぎの点を認める。善であるべき意志はそれ自体理想的完成の一部分である。私の論点はこうである。善であるべき意志は一部分であって、それについての知識は安楽の知識—安楽を知る見込み—を全然われわれに与えない。そして、それだけとして考えれば、それはいかなる実践的指導をも何ら与えることはできない。」³⁵⁾

グリーンは「善であるべき意志」を行為の根本原理とみているが、シジウィックはこれを理想的完成の一部分と見た。グリーンは上の意志からすべての能力の実現が方位づけられると考えているようであるが、シジウィックは能力の一部として意志をとらえている。両者の相違は前者が意志を重視するのに対し、後者は知識を重視することにある。グリーンにとっては、理想的完成への意志が問題であったようであるが、後者は理想的完成についての知識が問題であった。というのはシジウィックにとっては、知っているということが正しい行為を導く根本条件であったからである。グリーンにおいては、恐らく理想的完成への意志の実現過程において「安楽」が見出される、とされたのであろう。しかし、シジウィックは、知識の角度からあの完成を考察し、それを知っているということと安楽の知識との間に必然的結合関係が見られない、というのである。シジウィックが批判する点もわかるけれども、他方、意志を伴わないで単に善を知っているということだけでは、実践的指導も得られないようにみえるが、この点についてわれわれはどのように考えるのがよいであろうか。

シジウィックの第三の疑問点は自己の善と他人の善との関係についてである。グリーンもシジウィックもこの点に着目して議論を進めたが、その見方は

それぞれ違っている。グリーンは「自己の善と他人の善との区別は真の善（道徳的判断はこれにもとづいている）の観念に決してはいいことはない。」³⁶⁾といているが、シジウィックはこの言葉をとりあげ、「『自己の善と他人の善との区別は真の善（道徳的判断はこれにもとづいている）の観念に決してはいいことはない』とグリーンがどうしていつづけることができたのか、私は想像することができない。」³⁷⁾といている。なぜシジウィックはこのような否定的答をするのであろうか。シジウィックによると、自己の善と他人の善との間には矛盾・衝突があるとみられている。すなわち、他人を犠牲にすることなくして、自己の善が実現できるであろうか、という疑問が生ずるからである。「自分自身の幸福または友人のそれを促進することは他人の幸福を妨げるという犠牲を実際に含んでいる。」³⁸⁾この場合、かれは「犠牲」とか「自分自身の幸福」をどのように考えているのであろうか。この点についてかれは充分述べてはいないが、自己の幸福と他人の幸福との間には、なるほど、抽象的には矛盾があるようにみえるが、実際にいかなる場合にこの矛盾が生ずるのかを吟味する必要がある。その場合、幸福という名の下になされた行為が矛盾の原因であるとすれば、いったい幸福そのものがどのように考えられていたかが問題であろう。

シジウィックによれば、自己の善と他人の善とが矛盾・衝突すると考えられるのは「真の善」が能力の実現とされているからである。シジウィックはこれをつぎのようにのべている。「われわれがある個人の真の善についてのグリーン概念の内容を詳細に吟味し、完成または諸能力の完全な実現の観念を考えると、それが他の誰かの真の善と競争することができないであろう、というように実際に構成されているとはみえないと私は考える。何となれば人間的諸能力のこの実現は『芸術および科学』ならびに『とくに、道徳的諸徳』を含むべく、くり返しのべられているからである。」³⁹⁾

グリーンは「諸能力の完全な実現」を、ある人のそれと他の人のそれとに分けて、対立的相において考えたであろうか。もとより、諸能力の実現というとき、これはいろいろな人における能力実現として考えられ、矛盾も予想され、また人々の間において能力の実現をめぐる競争も起るであろう。しかし、グリーン「真の善」（諸能力の完全な実現）がどのような意味において考えられているのか

を理解しておく必要もあろう。グリーン「真の善」は「共同善（common good）」でもあった。かれは自己および他人に共通な善を考えているのである。したがって、「諸能力の実現」も共同善の角度からみられていることは明白である。それ故、ある人がかれのある能力を発揮するとき、それが他人のある能力の発揮を妨げるような仕方において働くことは考えられていないわけである。しかも、グリーンの自我は統一的自我でもあるから、諸能力の発揮が矛盾する方向に傾いているとすれば、自我はこれを是正すべく自己を統一し、対立をなくするように考え、意志しなければならない。

(6) グリーンの倫理学体系についての問題点

最後に、シジウィックがグリーン「倫理学序説」全体についてどのようにその構成を見ているかを考察しておくことにしたい。周知のごとく、「倫理学序説」の第一編は「知識の形而上学」である。ここでは、知識はいかにして成立するか、という認識論的問題がとりあげられている。グリーンは知識成立の原理を「結合し、自己識別し、自己客観化する作因」(combining, self-distinguishing and self-objectifying agency)という言葉で示した。ところで、シジウィックによれば、この原理がいかなる必然性をもって、第二編以下で問題にされている倫理学の諸議論と結合されるのか、換言すれば、知識の原理がいかにして矛盾なく第二編以下において一貫されるのか、という点が疑問であった。その疑問はつぎのような言葉にうかがわれる。「われわれは、この結合し、自己識別し、自己客観化する作因という概念から、『神聖性の理想』、『無限にかつ完全に善なる意志の理想』をいかにして得ることができるかを説明することがグリーンになお残されている。」⁴⁰⁾といわれ、「私は少なくとも、第一編の議論において『神聖性』という言葉が表現しているような何らかの特質を、グリーン「精神的原理に帰せしめる理由を何ら見出すことはできない。」⁴¹⁾といわれている。

「倫理学序説」の第二編、第三編をみると、「神聖性の理想」(Ideal of Holiness)という語が多く見られる。シジウィックの疑問は、「結合し、自己客観化する作因」から、いかにして「神聖性の理想」が導き出されるかであった。前者(知識の原理)は後者(道徳の理想)をいかにして導きだすのか。シジウィックによれば、両者は、グリーン「の体

系においては密接な関係をもっていないようにみえる、とされた。この点についてグリーンはどのように考えているのであろうか。「倫理学序説」のなかでは「永遠的な自己識別の意識」(eternal self-distinguishing consciousness)⁴²⁾ という語が用いられており、また「精神的自己識別の主体」(spiritual self-distinguishing subject)⁴³⁾ という言葉もみられる。これらの言葉から推察すると、グリーンは「自己識別の意識」は神的永遠的に考えられていることは明白である。「神的」といったのは、さきの語に「spiritual」という言葉が見られるからであり、この語が宗教的意味をもっているからである。してみると、「自己識別の意識」から「神聖性の理想」が導き出されないことはないようにみえる。この「意識」は単に知識を成立せしめるときの自我の意識のみではないようである。それは、グリーンにおいては、もつと広く考えられており、行為の問題に際しても適用されるものである。「倫理学序説」の第二編以下においては、**distinguishing** という作用は自我を **want** から区別する作用であり、**conbining** あるいは **unifying** は諸々の欲望を吟味した結果、真の欲望と自己とを結合することである。このように理解すると、「自己識別の意識」は倫理学の分野においても応用される。

シジウィックが不満に考えるのは、グリーンは体系においては自己識別の意識と神的精神とは全く違うはずであるにもかかわらず、相通じ合っているところにあった。「私の自己識別の意識は自己を他人からと同様に、神的精神からも区別する。それ故、このように区別された自己の満足を神的精神の満足と同一にすることはできない。」⁴⁴⁾ とシジウィックはいう。これを解釈すればつぎのようになる。自己識別の意識は自己と他人とをますます区別する。それは自己と他人とを結びつけるどころか、かえって自己と他人との対立が深まる。第二に、自己識別の意識は自己と神的精神とを区別せしめることになる。人間精神と神的精神とは異ったものとしてみられる。

以上の見方は正しいであろうか。シジウィックはあくまで、人間精神と神的精神とを峻別し、さらに、前者のなかに後者が内在していることを否定さえしようとしているように受けとれる。なぜかといえば、グリーンは「われわれの内の永遠意識の再現または実現」に対して、シジウィックは「動物有機体とその機能を除いてみよ、そしてそれと結合している

永遠意識の諸制限をとり除いてみよ、何が残るか。そうだな、制限のない永遠意識にすぎない。」⁴⁵⁾ といっているからである。かれの分析的科学的立場の一端がここにかがわれる。自己識別の意識においては、恐らく「動物有機体」と「永遠意識」とは対立し、区別されているだろう。しかるに、なぜ「われわれの内の永遠意識の再現または実現」という矛盾した表現がでてくるのか。このような事情において、自我の統一ということが果して考えられるのであろうか。これがシジウィックの疑問であったようである。

その証拠にシジウィックはグリーンは「一つの不可分の自我」(one indivisible self) についてつぎのように批判しているからである。「グリーンはいう『われわれの意識はつぎの二つのなかのいずれかを意味するだろう。漸次永遠意識の媒介にさせられる動物有機体の機能か、それとも動物有機体をその媒介にするところの永遠意識自体かである。』と。そこで、グリーンはつぎのようについてわれわれを安心させる、われわれの意識は依然として『一つの不可分の実在』であると。そして、まさに区別された二つのものは『一つの不可分の実在』の二側面にすぎず、二つの異つた観点からみられた同一のものであると。

私は私自身をこのように考えることはできない。私は神を私の一側面と考え、私の身体を他の面と考えることはできない。私がこのように考えることに成功したとすれば、自我の本質の統一は消えてしまっただろう、と思われる。……しかし、一つの不可分の自我がどうして動物有機体と自己限定的永遠意識とを二つの側面としてもつことができるだろうか私にとってわからない。」⁴⁶⁾ 確かに、人間をありのままに考察すれば、シジウィックのいうように、人間を神の一側面と動物有機体とに分けて考えたり、また、かれが二つの側面をもっていると考えたりするのは、理解できない点かもしれない。人間の内に神の可能性を含めて、何ら不都合はないかどうかは問題であろう。それは倫理学の問題というよりも神学の問題であるかもしれない。われわれはここではグリーンは倫理学に限定して考察するとき、シジウィックの批判においてはグリーンは自我はあまりにも区別能力という自我の一側面からのみ見られているくらいはありはしないか、という反論が起る。自我には、結合するはたらき、統一するはたらきが含まれている。この点を、区別するはたらき

と同程度に、公平に見きわめる必要がある。

われわれは視点をグリーンの完成論に向け、これについてシジウィックがどのように批判しているかを考察し、両者の思想構造を比較してみよう。グリーンにおいては人間完成は諸能力の実現によって可能となる。シジウィックもこの点については理解している。「第二章（「倫理学序説」の第三編、第二章）の出発点は『人間精神のなかに一つの神的精神が漸次再現することである』という点にある。人間が一定の諸能力をもつのはかれのうちのこの原理による。かれはそこにおいてのみ自己自身を満足させることができるから、それらの能力を実現することによって、真の善が形成される。」⁴⁷⁾「しかし、これは個々の行為者がかれ自身のなかに、その（一つの神的精神の）実現を求めるのが合理的か、それとも他人のなかにのみ求めるのが合理的か、という根本問題を明確に決定しない。」⁴⁸⁾シジウィックがこのような発想をとるのは、かれにおいて自愛と仁愛との関係が問題になっていたからであろう。この二つは対立し、矛盾するものと考えられていたのである。かれはこの二つをいかにして調整すべきかを問題にし、あるときは自愛を優位においており、あるときは仁愛をも同等に扱った。この場合、どのような調整方法が合理的といえるのかがかれの問題であった。この見地から、シジウィックはグリーン「一つの神的精神」を考察した。この精神がシジウィックの問題を解決するためのカギとなるかどうか、という疑問がかれの心にいだかれていたようである。シジウィックは自愛と仁愛とを並べ、二元的観点から、両者の関係を考察したので、グリーンに見られる自我の一元論的議論に抵抗をもったようである。

以上の考察によってわれわれはつぎのように要約してよい。まず、グリーンはシジウィックに対して、つぎの諸点を問題にした。第一に、シジウィックの倫理学の構造は二元論によつて貫かれている。第二に、この二元論は *self-love* と *Benevolence* とによつて支えられている。第三に、これらがいかにして調和されるか。第四に、シジウィックの快樂主義は確固たる前提としてはあまりにも多くの問題を含んでいる。その問題点は快樂のはかなさと快樂の総計とについてであった。つぎに、シジウィックはグリーン倫理学について以下のような諸点を問題とした。第一に、自我の統一性という概念はグリーン倫理学の体系から果して出てくるであろうか。自我は自己識別的能力によって統一を破られるのではないか

第二に、諸能力の実現はいかにして測定されるのか。その尺度は何か。第三に、自我の満足は永久的となり得るだろうか。自我は自己自身を神的精神から区別するから、永久的満足を得ることはできないのではないか。われわれはシジウィックの倫理学とグリーン倫理学とを比較することによって、それぞれの体系についてのみならず、体系を支えている思想に問題があることを再認識するのである。

文 献

- 1) C. D. Broad, *Ethics and the History of Philosophy*, 1952, p. 51.
- 2) W. D. Lamont, *Introduction to Green's Moral Philosophy*, 1934 pp. 20—21.
- 3) 道徳と教育（日本道徳教育学会編）1964, 5月号参照
- 4) C. D. Broad, *Ethics and the History of Philosophy*, p. 49.
- 5) *ibid.* p. 50.
- 6) C. D. Broad, *Five Types of Ethical Theory*, 1930, Seventh Imp. 1956. p. 143.
- 7) *ibid.* pp. 143—44.
- 8) *ibid.* p. 143.
- 9) W. D. Lamont, *Introduction to Green's Moral Philosophy*, p. 19.
- 10) C. D. Broad, *Five Types of Ethical Theory*, p. 59.
- 11) *ibid.* p. 144.
- 12) W. D. Lamont, *Introduction to Green's Moral Philosophy*, p. 21.
- 13) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, Impression of 1924. pp. 449—50.
- 14) H. Sidgwick, *Methods of Ethics* (1874, 1901), p. 382.
- 15) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, p. 455.
- 16) *ibid.* p. 455.
- 17) H. Sidgwick, *Methods of Ethics*, p. 135.
- 18) *ibid.* pp. 136—37.
- 19) *ibid.* p. 48.
- 20) *ibid.* pp. 47—8.
- 21) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, pp. 268—69.
- 22) *ibid.* p. 441.
- 23) *ibid.* p. 265.
- 24) *ibid.* p. 266.

- 25) *ibid.* p. 258.
- 26) H. Sidgwick, *Methods of Ethics*, p. 133.
- 27) *ibid.* p. 135.
- 28) H. Sidgwick, *The Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, 1902, p. 64
- 29) *ibid.* pp. 47—48.
- 30) *ibid.* p. 48.
- 31) シジウィックがいう「諸方法」とは, Egoismの方法(または原理), 直覚主義の方法(または原理), 功利主義の方法(または原理), の三体系をさしている。これらの三方法をかれは *Common sense* と関連せしめて, 分析した。
- 32) H. Sidgwick, *Methods of Ethics* p. 505.
- 33) *ibid.* p. 505.
- 34) H. Sidgwick, *The Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, p. 75.
- 35) *ibid.* p. 76.
- 36) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, P. 272.
- 37) H. Sidgwick, *The Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, p. 67.
- 38) *ibid.* p. 66.
- 39) *ibid.* p. 69.
- 40) *ibid.* pp. 11—12.
- 41) *ibid.* p. 13.
- 42) T. H. Green, *Prolegomena to Ethics*, p. 107.
- 43) *ibid.* p. 99.
- 44) H. Sidgwick, *The Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, p. 56.
- 45) *ibid.* p. 62.
- 46) H. Sidgwick, *The Philosophy of Kant and other Lectures*, 1905, pp. 264—65.
- 47) H. Sidgwick, *The Ethics of T. H. Green, Herbert Spencer, and J. Martineau*, p. 49
- 48) *ibid.* p. 50.

Green and the Ethics of Hedonism

Sigeru Yukiyasu

Green and Sidgwick are great philosophers in England in the nineteenth century. The former belongs to the school of idealism. The latter is an Utilitarian based on intuitionism. They considered the central problems of ethics. Green criticized Sidgwick's Hedonism. According to Sidgwick, pleasure is identified with Ultimate Good. The greatest possible sum of pleasure is the supreme end of action. But Green affirmed that pleasant feelings are not quantities that can be added. For each is over before the other begins. Green says that the greatest possible sum of pleasure is an end which for ever recedes. This is called the consciousness of the transiency of pleasure.

On the other hand, Sidgwick criticized the conception of self in Green. According to Green, self is a self that abides and contemplates itself as abiding. This self must be satisfied in any way. Green's self-satisfaction is the satisfaction of abiding self. But Sidgwick criticized this point. According to Sidgwick, eternal self-satisfaction does not seem to be derived from Green's self. Green's principle in knowledge is a self-distinguishing consciousness. Sidgwick says that the consciousness distinguishes human spirit from divine spirit. Thus, human spirit cannot be identified with divine spirit. On what ground does Green assert eternal self-satisfaction? This is the question of Sidgwick.

Green criticized Sidgwick's Ultimate Good. According to Sidgwick, Ultimate Good is Universal Pleasure. This pleasure is to be sought as desirable. In Sidgwick the desirable is another person's pleasure. Green asserts that the desirableness of a pleasure must be the pleasure of some one else than the person desiring the enjoyment of the pleasure. Green says that a man cannot seek his own pleasure as desirable. It is from Sidgwick's reason that he is subject to these criticisms. According to Green's view, reason seeks Ultimate Good as a state of its own being. Reason is the source of the idea of a perfect self-conscious life for every one.

Green is concerned with a constant and fixed self. Sidgwick's ethical principles are rational self-love and benevolence. Green asks 'How are the two reconciled?' In Sidgwick they seem to be unreconciled. Judging from these considerations, we know that Green is interested in the unity of self.